

# 自由診療 客単価 25%UP の秘密 実技セミナー

客単価を 25%以上 UP し、なおかつ、一流アスリートや医師から**絶大の信頼**を集めることができる、**驚くべき施術体系**を公開。



**受講生の声** 自由診療の組み立てが楽になりました。また、藤原先生のアドバイスで自由診療を4,200円から5,500円へと26%以上も値上げしたのですが、その

後、患者数も伸びています。

患者様からの信頼度も上がり、診療に情熱を注げるようになりました。

ライバル院に対する不安感もなくなりました。藤原先生、本当にありがとうございました。

加藤 義彦 先生(仮名) 柔道整復師

## 講師略歴

藤原 邦康 DC

ICAK 認定 アプライドキネシオロジー(AK)ドクター

1970年静岡県浜松市生まれ。

カリフォルニア州立大学(映画専攻)卒業後、株式会社ティー・ワイ・オーにてCG映像の制作に携わった後、米国ライフウェスト・カイロプラクティック大学へ転進。

2004年 米国ライフウェスト・カイロプラクティック・カレッジ卒業

2006年 カイロプラクティック・オフィス「オレア成城」開院

クライアントには、一流アスリートや医師などが連なる。

**講義内容:** **アプライド・キネシオロジー (AK)** を活用した施術法の紹介。

**日時:** 2011年8月21日(日) 14時~17時

**受講料:** 5,000円(通常料金)

この講座は、こんなあなたにオススメです。

- ✓ 治療することが楽しくない。
- ✓ 専門学校を卒業したが現場で働けていない。
- ✓ 本物の技術が欲しい。
- ✓ 開業したいが自信がない。
- ✓ もみほぐすだけの施術に限界を感じる。
- ✓ 症状を改善できる治療家になりたい。
- ✓ 価格競争に終止符を打ちたい。
- ✓ 回転数を上げるのがもう限界。
- ✓ もみほぐし施術でスタッフが疲労困憊している。
- ✓ 同じ施術が顧客に飽きられている。

藤原 DC に寄せられる、よろこびの声  
**腕がいい!**



他の店でも鎖骨がゆがんでいるとは言われていましたが、こちらでは1回の治療にも関わらず、鎖骨のゆがみが小さくなり、左右の骨の高さの違いも小さくなりました。

しかも、あごに音がしていたのですが、そちらも小さくなりました。  
あごに特に何かをされたわけではないのですが、何でも首と背中調整することであごの音がするのが小さくなったらしいです。

とても驚きましたが、先生の腕の良さには驚きました。

この講座を受けることで以下の内容を学ぶことができます!

- ✓ 料金を値上げしても納得して継続来院してもらえるのはなぜか?
- ✓ 一瞬で患者の心をわしづかみにして尊敬と信頼を集めるには?
- ✓ 「治療はつまらないもの」という固定観念がなくなり、スタッフも楽しめる治療とは?
- ✓ 短い治療時間でも「やってもらった」感を味わってもらえる方法は?
- ✓ ビフォー・アフターを患者に実感してもらうためにはどうしたらよいか?

⇒ **まずは、ワークショップであなた自身が体験してください。**

# 降旗学の「長目飛耳」

NBonline

トップページ>ライフ>降旗学の「長目飛耳」

コメント トラックバック 印刷  
腰痛が促した、アナログの極への転身

・2007年10月26日 金曜日・降旗学・腰痛 CG カイロプラクティック

**著者プロフィール** 降旗学 (ふりはた・まなぶ)  
ノンフィクションライター。1964年、新潟県生まれ。神奈川大学法学部卒。英国アストン大学留学。96年、第3回小学館ノンフィクション賞・優秀賞を受賞。主な著書に『残酷な樂園』『敵手』『松坂大輔 証明』他、剣崎学のペンネームで書いた『都銀暗黒回廊』など。近著は『草野球をとことん楽しむ』（新潮新書）

カイロプラクターの道を選んだのは、自らの腰痛がきっかけだった。

それ以前の藤原邦康(ふじわら・くにやす)は、コンピューターグラフィックスを専門に手がける映像会社でアシスタントプロデューサーを勤めていた。

「一週間10日の泊まり込みなんてざらにあって、三週間家に帰れなかったのが最長だったと思います。プロジェクトを何本もかけ持ちしていたからですが、とにかく忙しかった。迂闊に食材なんか買い置いたりすると大変なことになって……、だからほとんど外食で済ませました。“電通26時集合 打ちあわせ”なんてスケジュールは当たり前だったんです」

映像技術はアメリカで学んだ。

中学生の時に観たスティーブン・スピルバーグやジョージ・ルーカスの映画に魅了され、高校卒業後に渡米。カリフォルニア州立大学で映画を専攻する。帰国した1995年は、日本でもCGが目ざされはじめた時期でもある。

彼はCM制作会社に籍を置いていたが、仕事は次から次へと舞い込み、会社のほうで受けきれない依頼は半ばフリーのような立場で個人的に引き受けざるを得ない状況にもなった。どんなCGを手がけたかと訊いても、すぐには思い浮かばないほどだ。

「コマーシャルで言えばコカ・コーラとかトヨタプリウス、それからイチロニッサン……、ありましたよね。爽健美茶で蝶々がひらひら舞うCGもやったな。動画もやりました。タカラトミーさんのアニメとか、ゲームのオープニングムービーをつくったこともある。CGの搖籃期と言ってもいい時期だったんです」



藤原邦康氏(写真:山本 雷太 以下同)

オフィスでは、何脚か並べた椅子をベッド代わりに仮眠なり睡眠をとった。

それすらも煩わしくなると、フロアの上で直に横になった。腰痛の原因は、どうやら不安定な体勢での睡眠にあったらしい。いまの仕事に興味を持ったのは実際にカイロプラクティックを受けたのがきっかけだが、藤原には別の理由もあった。

「あの当時ですら、映像業界では“SE30歳年説”があったんです。コンピューターは日進月歩の勢いで進化していた。半年に一度は技術体系が変わって、ちょっと気を抜くと置いて行かれるような現状があったんです」

コンピューターの進化についていける限界が30歳と言われていた。

藤原はその30歳になろうとしていた。映像の世界はまずスポンサー(クライアント)がいて、次に広告代理店があり、その下に制作会社がある。末端で働く藤原らが打ちあわせで開口一番に言われることが、今回はちょっと予算が少なく——、というものだった。そのたびに気持ちが萎えた。

技術は進歩している。その技術を使いこなす腕もある。だが、テクニックを存分に発揮できるだけの予算がない。30歳という若さは、このまま映像の仕事が続けていても大成できるのだろうかという不安を抱かせるだけだった。それが頭の隅に引っかかっていたことが大きいと言う。

つづきはWebサイトで <<http://nkbp.jp/khmNQ2>>「長目 腰痛が促した」で検索。